

①

「おいで、ぼくと遊ぼう」王子さまは声をかけた。「ぼく、今すごく悲しいんだ……」

「きみとは遊べない」キツネが言った。「なついでないから」

「ああ、失礼！」王子さまは言った。

けれど、しばらく考えてから、こうたずねた。

『なつく』って、どういふこと？」

「きみ、この人じゃないんだね」キツネが言った。「なにをさがしてるの？」

「人間たち」と王子さま。『なつく』って、どういうこと？」

「人間たちって」とキツネ。「銃を持って狩りをするんだ。いやだね！ニワトリも飼ってる。いいのはそれだけ。きみ、ニワトリをさがしてるの？」

「ううん」王子さまは言った。「友だちをさがしてるの？」

「ずいぶん忘れられてしまってることだ」キツネは言った。「それはね、『絆を結ぶ』ということだよ……」

「絆を結ぶ？」

「そうとも」とキツネ。「きみはまだ、ぼくにとつては、ほかの十万の男の子とにも変わらない男の子だ。だからぼくは、べつにきみがいなくてもいい。きみも、べつにぼくがいなくてもいい。きみにとつてもぼくは、ほかの十万のキツネとなんの変わりもない。でも、もしきみがぼくをなつかせたら、ぼくらは互いに、なくてはならない存在になる。きみはぼくにとつて、世界でひとりだけの人になる。ぼくもきみにとつて、世界で一匹だけのキツネになる……」

「ちよつとわかってきた……」王子さまが言った。「花がいてね……花はぼくをなつかせてたんだな……」

「そういうのもあるかもしれない」とキツネ。  
(……)

「ぼくの暮しは単調だ。ぼくがニワトリを追いかけ、そのぼくを人間が追いかける。ニワトリはどれもみんな同じようだし、人間もみんな同じようだ。だからぼくは、ちよつとうんざりしてる。でも、もしきみがぼくをなつかせてくれたら、ぼくの暮しは急に陽が差したようになる。ぼくは、ほかの誰ともちがうきみの足音が、わかるようになる。ほかの足音なら、ぼくは地面にもぐつてかくれる。でもきみの足音は、音楽みたいに、ぼくを巢の外へいざなうんだ。それに、ほら！むこうに麦畑が見えるだろう？ぼくはパンを食べない。だから小麦にはなんの

用もない。麦畑を見ても、心に浮かぶものもない。それはさびしいことだ！でもきみは、金色の髪をしている。そのきみがぼくをなつかせてくれたら、すてきだろうなあ！金色に輝く小麦を見ただけで、ぼくはきみを思い出すようになる。麦畑をわたっていく風の音まで、好きになる……」

キツネはふと黙ると、王子さまを長いあいだ見つめた。

「おねがい……なつかせて！」

「ぼくもそうしたいけど」王子さまは答えた。「あんまり時間がないんだ。友だちを見つけないといけないし、知らないきやいけないこともたくさんある」

「なつかせたもの、絆を結んだものしか、ほんとうに知ることはできないよ」キツネが言った。「人間たちはもう時間がなくなりすぎて、ほんとうには、なにも知ることができないでいる。なにもかもできあがった品を、店で買う。でも友だちを売ってる店なんてないから、人間たちにはもう友だちがいない。きみも友だちがほしいなら、ぼくをなつかせて！」

「どうすればいいの？」王子さまは聞いた。

「がまん強くなることだ」キツネが答えた。「はじめは、ぼくからちよつとだけ離れて、こんなふうに、草のなかにすわるんだ。ぼくは横目でちらっときみを見るだけだし、きみもなにも言わない。ことばは誤解のもとだから。でも、日ごとにきみは、少しずつ近くにすわるようになって……」

(……)

こうして小さな王子さまは、キツネをなつかせた。だが、出発のときが迫っていた。

「ああ！」キツネが言った。「……ぼく、泣きそうだ」

「きみのせいでしょ」王子さまは言った。「ぼくはきみに、いやな思いなんか少しもさせたくなかった。でもきみが、なつかせてって言ったから……」

「そりやそうだよ」キツネは言った。

「でも、泣くんではよ！」

「そりやそうだよ」

「じゃあ、いいことなんてなかったじゃない！」

「あつたよ」とキツネ。「麦畑の色だ」

そしてこう言った。

「もう一度、バラたちに会いに行つてごらん。きみのバラが、この世に一輪だけだつてことがわかるから。それからぼくに、さよならを言いに来て。そうしたらきみへの贈り物に、秘密を

ひとつ、教えてあげよう」

(……)

それから王子さまは、キツネのところに戻った。

「さようなら」王子さまは言った……

「さようなら」キツネが言った。「じゃあ秘密を教えるよ。とてもかんたんなことだ。ものごと

とはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない」

「いちばんたいせつなことは、目に見えない」 忘れないでいるために、王子さまはくり返した。

「きみのバラをかけがえのないものにしたのは、きみが、バラのために費やした時間だったんだ」

「ぼくが、バラのために費やした時間……」 忘れないでいるために、王子さまはくり返した。

「人間たちは、こういう真理を忘れてしまった」キツネは言った。「でも、きみは忘れちゃいけない。きみは、なつかせたもの、絆を結んだものには、永遠に責任を持つんだ。きみは、きみのバラに、責任がある……」

「ぼくは、ぼくのバラに、責任がある……」 忘れないでいるために、王子さまはくり返した。

② 「星々が美しいのは、ここからは見えない花が、どこかで一輪咲いているからだね……」

僕は「ああ、そうだ」と答えると、あとはもう何も言わずに、月に照らされたやわらかな砂の起伏を見つめた。

「砂漠って、美しいね」王子さまが、ぼつりと言いたした……

そしてそれは、ほんとうだった。僕はずっと、砂漠が好きだった。なだらかな砂の丘にすわれば、あたり一面、なにも見えない。なにも聞こえない。それでもその静寂のなかで、なにかがひっそり光っている……

「砂漠が美しいのは」王子さまが言った。「どこかに井戸を、ひとつかくしているからだね……」

このとき不意に、僕はなぜ砂漠が不思議な光を放つのかわかって、息をのんだ。僕は子どものころ、古い時代に立てられた家に住んでいたのだが、その家にはどこかに宝物がうめられて

いるという言い伝えがあった。もちろん、それを見つけた人は誰もいなかったし、もししたら、さがすことさえなかったかもしれない。でもそれが、家全体に不思議な魔法をかけていた。僕の家は、その見えない中心部の奥に、秘密をひとつかくしていたわけだ……

「そうだね」僕は王子さまに言った。「家や、星や、砂漠を美しくしているものは、目には見えないね！」

「うれしい」王子さまが言った。「きみが、ぼくのキツネと同じ考えて」

③ (……) そうして僕は、夜、星々の笑い声に耳をすまそうのが、好きになった。ほんとう

に、五億もの鈴が鳴り響いているようだ……

ところが、とんでもないことに気がついた。王子さまに描いた口輪に、革ひもをつけるのを忘れていたのだ！あれではヒツジに口輪をはめられなかっただろう。僕は思い悩む。(王子さまの星はどうなっただろう？もしかししたらあのヒツジが、花を食べちゃったかもしれないぞ……)

あるときは、続けてこう思う。(そんなことないさ！王子さまは毎晩ガラスのおおいで花を守ってやるんだし、ヒツジのこともしっかりと見はっているだろう……)すると僕はうれしくなる。星という星がぜんぶ、やさしく笑う。

けれどあるときは、こうも思う。(たった一回、うっかりしたらおしまいだ！ある晩、王子

さまがガラスのおおいを忘れたら。夜中にヒツジがこっそり逃げだしたら……)すると鈴という鈴がぜんぶ、涙にくれてしまう……

ここにこそ、おおいなる神秘がある。小さな王子さまが大好きなきみたちにとっても、僕にとっても、誰も知らないどこかで、僕らの知らないヒツジが、バラを一輪食べたか食べないかで、世界のなにもかもが、これまでとはすっかり変わってしまうのだから……

空を見あげてみてほしい。そしてこうたずねてみてほしい。(あのヒツジはあの花を、食べたかな、食べてないかな?)するとなにもかもが変わって見えるのが、きみたちにもわかるだろう……

でもそれが、どんなに大事なことか、おとなには、ぜんぜんわからないだろう！

『星の王子さま』河野万里子訳(新潮文庫)